

『開目抄』に明示される 本門戒の諸相(中)

——本門戒壇の戒・定・慧の実義等分類への試論——

大本山本圀寺現燈 早川 日章

(上からの続き)

ところで、本抄を離れ宗祖の思いを訪ねると、三年後に書かれた『曾谷入道殿許御書』に

「慧日大聖尊仏眼を以て兼て之を鑑みたまう。故に諸の大聖を捨棄し此の四聖を召し出して要法を伝え、末法の弘通を定めたまいしなり。

問うて日く、要法の経文如何。

答えて日く、口伝を以て之を伝えん。

積尊然して後、正像二千年の衆生の為に宝塔より出でて虚空に住立し、右の手を以て文殊・観音・党・帝・日月・四天等の頂を摩でて、是の如く三反して法華經の要よりの外の広略二門並に前後の一代の一切經を此等の大士に付属す。正像二千年の機の為なり。」

〔曾谷入道殿許御書〕池上本門寺 朝夕 四九五頁)

と、お書きになられています。末法弘通の最も重要な教えである要法とは如何なる内容なのか、宗祖はそれについては経文でなく、口伝の方法で伝えると、明確にお述べになられています。

つまり、このように宗祖が法華の口伝を重要視されていたこ

とを私達は改めて知らされるのです。同時に、四句要法が極めて広汎で奥深い内容を秘めた法華經の神奥の義であるので、宗祖はその教えへのいざないを或いは、ご自身の今後の課題とされていたとも考えられます。従って、『開目抄』で「上行菩薩への依嘱」を敢えて取り上げなかった事情はこの辺りにあったといふべきかもしれません。

十三、久遠実成の仏の命の永遠性は、本門戒壇の円定 の実義なり

「其後仏、書量品を説云く一切世間の天・人及び阿修羅は、皆今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり」等云々。此經文は始寂滅道場より終法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。

「然るに善男子、我に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佗劫なり」等云々。此の文は華嚴經の三処の「始成正覺」、阿含經云「初成」、淨名經の「始坐仏樹」、大集經云、「始十六年」、大日經「我昔坐道場」等、任王經「二十九年」、無量義經「我先道場」、法華經の方便品云「我始坐道場」等を、一言に大虚妄なりとやぶるもんなり。」

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三二〇頁)

如来、太子為りし時、釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。〔從地湧出品〕お悟りを開かれ、ほとけに成られたといえ、未だ人間の匂いがする釈迦牟尼である。然るに、

「我、仏を得てよりこのかた、経たる所の諸の劫数、無量百千万億載阿曾祇なり」

〔壽量品〕

と、釈尊が遙な昔にお悟りを聞かれたと表明されたことは大悟の有無もさることながら、御自身のいのちの永遠なることを高らかに宣言されたのでもあります。仏のいのちが永遠であるという極めて重大な意味を内包する久遠実成であります。

久遠実成は、連鎖的に大變動を多方面に亘つてもたらしめます。『分別功德品』には、弥勒菩薩は「世尊は大力有して寿命量るべからず」と述べ、微塵数の菩薩は仏寿の長遠・無量なることを聞いて仏道を成ずることを得るのであったと、その反響の凄さ、甚大なることが繰り返して語られていきます。

釈尊のいのちの永遠なることは、広大なる仏力を以て、あらゆる衆生を永遠に導いて下さることを保証されるものであり、強い意志と絶対の信頼と満福の安心感等を与えて下さるものでもあります。ゆえに、いのちの永遠性を有す報身仏、釈尊は、本門戒壇の中央に本門円定の本尊として鎮座されるべきものである。

十四、久成による確定の本尊は、本門戒壇の円定の法体・実義なり

「教主釈尊、此等の疑を晴さんために壽量品をとかんとして、爾前迹門のききを挙云「一切世間の天・人及び阿修羅は、皆今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たり

と調えり」等云々。正此疑答云「然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佉劫なり」等云々。

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 一九八頁）

「又今よりこそ諸大菩薩も梵・帝・日・月・四天も教主釈尊の御弟子にては候え。されば宝塔品には此等の大菩薩を仏我が御弟子とおぼすゆえに諫曉云「諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に、誰か能く此の経を護持し誦諭せん、今仏前に於て、自ら誓言を説け」とは、したたかに仰下しか。

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三一五頁）

「諸仏、釈迦如来の分身たる上は、諸仏の所化申におよばず。何況此土の劫初よりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊の御弟子にあらずや。而を天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり。俱舎・成実・律宗は三十四心断結成道の釈尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我身は民の子とおもうごとし。華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗の四宗は大乗の宗なり。法相・三論は勝応身に在る仏を本尊とす。大王の太子、我が父は侍とおもうごとし。華嚴宗・真言宗は釈尊を下て蘆遮那・大日等を本尊と定。天子たる父を下て種姓もなき者の法王のごとくなるにつけり。浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とおもて、教主をすてたり。禅宗は下賤の者、一分の徳あて父母をさぐるがごとし。仏をさげ経を下。此皆本尊に迷。」

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三二一—三二二頁）

爾前経のすべての宗派で、夫々に大切に選ばれた仏さまとはいえ、法華経の久遠実成の釈迦牟尼仏を措いて本尊には成れない。それは応身仏の釈迦が成道の後、四十余年間で説いたお経から誕生した諸仏であるからだ。未顕真実の諸経の仏さまは真

に本尊と成り得ないために、諸宗は本尊に迷ってしまふのだ。各宗が本尊に迷う中で、寿命品の釈迦牟尼仏が要説眞実と定め、無始無終・久成の本仏であると確定されたことにより、爾前経に説かれる十方の仏は皆、本仏釈迦牟尼仏の分身仏と確定された。これにより、宗祖は大曼荼羅における分身仏の順序次第、位置を定められた。よって、法華経の本門に説かれた久成の報身仏、釈迦牟尼仏こそが諸経の中での唯一のご本尊である。よって、このご本仏は本門戒壇の円定の法体であり、実義となります。

十五、久成により衆生の命の永遠なるは、本門戒壇の円戒の実義なり

「本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前・迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。」

『開目抄』池上本門寺 朝夕 二九九頁

「世尊は大恩まします。稀有の事を以て、憐愍教化して、我等を利益したまう。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもつて供給し、頭頂をもつて札敬し、一切をもつて供養すとも皆報ずること能わじ。」

『開目抄』池上本門寺 朝夕 三〇八頁

九界は無始の仏界に具しとは、仏界の仏の命と同様に、九界の全ての衆生も無始無終で、永遠のいのちを生きており、しか

も、ここに永遠の宗教世界が聞かれていることを指示する。仏界も無始の九界に備てとは、地獄の中にも浄土はあり、極悪の衆生にも仏は影現し、生死の苦海は悟りの大海なること等々を指示する。すべからく、我等衆生は自らに久遠の生命あるを自覚し、成仏の大事へ向けての修行を為してゆかねばならない。それは慈悲深き世尊が永遠にお導きくださることに對しての、一身を捧げての永遠の報恩行である。

「比丘、當に知るべし 諸仏の出世には知遇すべきこと難し。所以は者何、諸の薄徳の人は無量百千万億劫を過ぎて或は仏を見る有り 或は見ざる者有り」

『寿命品』

衆生（薄徳の人を含む）は仏に知遇するために永遠の命を灯し続けて行くのである。私達は何処から来て、何処へ行くのかを確かには分からないが、唯、法華経の普遍の十方世界を生き3 続けてゆくことを揺るぎなく確信する。加えて、このいのちの灯を何のために燃やさなければならぬのかも知っている。

「心に恋慕を懐き、仏を渴仰して、便ち善根を種ゆべし」

『寿命品』

久成の本仏に知遇するために私個人の為だけでなく、否、私個人は差し措いてでも、他人にそのための法華信仰を勧め、善根の種子を植えてあげねばならない。



十六、久成による法華經の優越性は、本門戒壇の円慧の実義なり

「仏久遠の仏なれば、迹化・他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。一切經の中に此壽量品ましまさずば、天に日月無く、国に大王無く、山河に珠無く、人に神のなからんがごとくしてあるべきを、華嚴・真言等の権宗の智者とおぼしき澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往権宗の人々、且は自依經を讚歎せんために、或云、「華嚴經の教主は報身、法華經は応身」、或云、「法華壽量品の仏は無明の辺域、大日經の仏は明の分位」等云々。(中略)今濁世の学者等、彼等の讒義に隠て壽量品の玉を翫ばず。」

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三二二頁

「華嚴の澄觀は華嚴の疏を造て、華嚴・法華相對して法華を方便とかけるに似ども、「彼宗之を以て実と為す、此の宗の立義、理通ぜざることなし」等とかけるは悔還にあらずや。弘法又かくのごとし。龜鏡なければ我が面をみず。敵なければ我非をしらず。真言等の諸宗の学者等我非をしらざりし程に、伝教大師に会いたてまつて自宗の失をしるなるべし。されば諸經の諸仏・菩薩・人天等は、彼々の經々にして仏にならせ給ようなれども、実には法華經にして正覺なり給えり。釈迦・諸仏の衆生無辺の総願は皆此經において満足す。「今者已満足」の文これなり。」

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三二四頁

こうして久遠実成による報身仏の出現は、五重相對により、一切の他宗・他經に対する法華經本門の絶對的な優位性が示さ

れるのである。諸經により衆生の成仏が可能に見えても、それは見せかけである。実は、この法華經の下種が、それぞれに内蔵されているために衆生は仏に成れるのである。すなわち、釈迦、分身仏が誓願する衆生済度は、この法華經の實踐と釈尊の加護と導きにおいてのみ実現されるのである。よつてこの法華經の絶對的優位性は本門戒壇の円慧として諸宗に対し、この上無く重厚な光を放ち続けるのである。

十七、久成で諸仏が分身仏となるは、本門戒壇の円定の実義なり

「今久遠実成あらわれぬれば、東方の薬師如来の日光・月光、西方阿弥陀如来の觀音・勢至、乃至十方世界の諸仏の御弟子、大日・金剛頂等の両部大日如来の御弟子の諸大菩薩、猶教主釈尊の御弟子也。諸仏、釈迦如来の分身たる上は、諸仏の所化申におよばず。何況此土の劫初よりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊の御弟子にあらずや。」

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三二二頁

乱立する余經の諸仏と本仏釈尊との位置づけは、法華經壽量品の久成により始めて明確となつたのである。その図式にあつては唯一久成本仏の釈尊の下にすべての仏が集合し、統一化されたのである。このことは宗祖の説く五重相對の理論からも明証される。小松邦彰氏の「文底に秘める事一念三千から見れば、釈尊は三千世間の總体、無始以来の無作三身である」〔日蓮宗事典〕との教觀相對の解説から、釈尊の法体が無作三身三千世間の總体かつ無始以来の無作三身であることは明確である。この最高位の釈尊に対しては、爾前經の全ての諸仏諸聖は對抗す

ることは出来ない。宗祖は爾前経或いは爾前経を奉ずる人々を呵責すれども、その諸尊等の全ては積尊の本来的な弟子・分身仏であると定義されるのである。

「諸仏釈迦如来の分身」「教主釈尊の御弟子にあらずや」と述べられる祖意に、実は宗祖の重要な思想が含まれていると思う。開目抄は爾前他宗への痛烈な批判が満載されているとみなされるが、併し、それだけでは無い。前出のように、本仏と分身仏、本仏と弟子という切っても切ることの出来ない本来的な関係性を提示されるのである。ある意味ではこれは当然の帰結である。しかし、それだけで通り過ぎて良いのだろうか。ここには何か重要なことを指し示しているのではなからうか。

拝察するに、宗祖は久成本仏を強固に推しだしつつも、一方では排撃すべき諸仏を悉く包摂されておられる。何故か。恐らく、宗祖はこのことにより、法華経による仏教の調和的統一化を図られているのではないだろうか。そうであるとすれば、宗祖が本抄の余論において撰折論を展開されておられるが、その考察においては、この仏教統一論は十分に尊釈せねばならないであろう。(本拙論(下)において私見を述べる予定です)

十八、久成により娑婆を本土と観るは、本門戒壇の円定の実義なり

「双林最後大般涅槃経四十卷、其外の法華前後の諸大乘経に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身・報身の顕本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乘経をばすてて、但涌出・壽量の二品には付べき。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 二一九頁

「然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百万億那由佗劫なり」等云々。此の文は華嚴経の三処の「始成正覚」、阿含経云「初成」、浄名経の「始坐仏樹」大集経云、「始十六年」、大日経「我昔坐道場」等、仁王経「二十年」、無量義経「我先道場」、法華経の方便品云、「我始坐道場」等を、一言に大虚妄なりとやぶるもんなり。此過去常顕時、諸仏皆釈尊の分身なり。爾前・迹門の時は、諸仏釈尊に肩並て各修各行の仏。かるがゆえに諸仏を本尊とする者、釈尊等を下す。今華嚴の台上、方等、般若、大日経等の諸仏は皆釈尊の眷属なり。仏三十成道の御時は大梵天王・第六天等の知行の娑婆世界を奪取給き。今爾前・迹門にして、十方を浄土とごうして、此土を穢土ととかれしを打かえして、此土は本土となり、十方浄土は垂迹の穢土となる。

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三二〇頁

文中の「打かえして」は重大な内容を苧む表現であり、そこには宗祖自身が人生を総括した極めて強い意思のほとぼしりが拝察される。その強義を考えるにあたっては先ず、宗祖の法華行者としての軌跡を確認しなければならぬと思う。

宗祖が法華行者として自らの中心的な使命とされたことは一体何であったのか。法華至上を論ずる執筆と辻立ちによる力強い宣明行動、妙法流布のための法華宗団の開発と組織化、遂には『立正安国論』による国家諫暁、集約すれば以上の三点ではなかったか。宗祖の余りに激しい行動は、いわゆる、心の安寧と極楽浄土を説く常識的な宗教家の枠を遙に逸脱したものであったことは論を俟たない。その結果、宗祖は行動の場を追われ、龍ノ口での処刑を辛うじて脱し、佐渡へ流されたのである。極

寒の流罪地、塚原においてもされた魂魄の書が本抄であり、全編に鋭い他宗批判が繰り広げられている。

この「打かえして」は寿量品の説く宗教的世界観を、宗祖が人智を越えた凄まじい体験を通して培った自からの身読でそれを解釈されたことを示す言葉である。即ち、爾前、迹門の浄土観を粉々に打ち毀し、娑婆を浄土とする新しい世界観への転回を全ての人々に強く迫っているのである。その厳格さは宗祖が国家諫曉で燃やし続けた闘魂がもたらすものである。

頑迷な天動説を打ち破り、地動説を唱えたコペルニクスの例に似て、仏教古来からの常識化された浄土観を否定し去り、その上で、宗祖はご自身の身読に基づいて「娑婆を浄土とする」という思想的転回を力強く宣言されたのである。これは前述した宗祖の半生に亘る、勝れた行動の結果が産み出した、新しい宗教的世界観乃至法華経的国家観である。何故ならば、この宗教的世界観の下では、どのような仏教集団であれ、現世を浄土に作り上げるといふ大きな課題を背負うことになるからである。悪世の娑婆から、来世の浄土に逃避することは宗教的責任を問われることになるのである。

「娑婆を浄土とする」という新思想はまさに、宗祖ご一生を賭けて、身を以てお示しなされた立正安国の誓願行であり、宗教におけるコペルニクスの転回と言わざるを得ない。

この本土こそ、「観心本尊妙」の「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり」と繋がる娑婆世界の浄土化である。本来あるべき絶対平和な娑婆を取り戻すために、これを阻害する邪悪なものとの闘いが広宣流布の爆流であり、本門戒壇の円戒の実義となるものである。

十九、久成による仏の父なる厳愛は、本門戒壇の円戒の実義なり

「妙楽大師は唐の末天宝年中の者也。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗、並に依経を深み、広勘て、壽量品の仏をしらざる者は父統の邦に迷る才能ある畜生とかけるなり。

「徒謂才能」とは華嚴宗の法藏・澄観・乃至真言宗の善無畏三蔵は才能の大師、子の父　をしらざるがごとし。

伝教大師は日本顕密の元祖、秀句云「他宗所依の経は一分仏母の義有り」と難も、然れども但愛のみ有りて嚴の義を闕く。天台法華宗は嚴愛の義を具す。一切の賢聖・学無学及び菩提心を発せる者の父なり」等云々。

〔開目抄〕池上本門寺 朝夕 三二二頁

久遠実成の仏を、諸仏の父に譬えたとき、諸宗には母の深い悲しみの情愛はあるとしても、慈しみの父が説く「厳しく志を掲げよ」というが如き、嚴愛なるものは天台法華宗のみにあるだけだ。それというのも、法華経の下で菩提心を起こすことができるのも積尊のお陰で、導きの父として拝むことができるからである。更に、その先には法華経広宣流布への厳しい行法の道が聞かれているのである。如来の使い・如来の所遣として説く「弘経（教）の三軌」はその主要な実践の行であり、実践の場でもある。久成の本仏のこのような一連の導きこそが嚴愛の義の内容である。このことは天台法華宗のみが備えているという。本門戒壇は懺悔と共に実践の行への誓いを行う場所であるならば、本仏の嚴愛は我々の実践すべき行となり、従い、本門戒壇の円戒の実義となるう。

二十、久成により法華經の種・熟・脱は、本門戒壇の円戒の実義なり

「真言・華嚴等の經教には種・熟・脱の三義、名字猶なし。何況其義をや。華嚴・真言經等の一生初地即身成仏等は、經權經にして過去をかくせり。種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり、道鏡が王位に居せんとせしがごとし。宗々互に權を諍。予、此れをあらそわず。但經に任すべし。法華經の種に依て天親菩薩種子無上を立たり。天台の一念三千これなり。華嚴經乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の趣旨、皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給えり。」

『開目抄』池上本門寺 朝夕 三三三頁

種・熟・脱の三義(三益)を法華經に見れば迹門と本門の二種がある。宗祖が此処で述べる主意は爾前經の成仏論は下種無き脱益で三義といえる代物でない。にもかかわらず、互いに覇を争っている。天台では種子とは一念三千をいう。

「又仏になる道は華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も、実には叶べしともみえず。但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。この一念三千も我等一分の慧解もなし。而ども一代經々の中には、此經計一念三千の玉をいだけり。余經の理は玉に似たる黄石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸經は智者猶仏にならず。此經は愚人仏国を種べし。「不求解脱、解脱自至」等云々」

『開目抄』池上本門寺 朝夕 三四七頁

宗祖は本抄の段階では、一念三千を理解することは容易では

ないが、しかし仏国を植え付けてくれることに間違いないと述べられる。しかしこの後、種子の定義は、一念三千から南無妙法蓮華經に変更される。甚深なる学解の上に、宗祖がいよいよ、教学の建立を志され、南無妙法蓮華經の一妙が開出され、その下に三大秘法が組み立てられたのである。その結果、本門では「一妙」は天台の一念三千を包摂し、下種する種は一妙に変わり、よって、「一妙を下種する」ように改まったのである。

「されば正法には教行証の三つ俱に兼備せり。像法には教行のみ有て証無し。今末法に入ては教のみ有て行証無く在世結縁の者一人も無し。權実の二機悉く失せり。此時は濁悪たる当世の逆謗の二人に、始て本門の肝心南無妙法蓮華經を以て下種と為す。「是の好き良菓を今留めて此に在く。汝取つて服すべし。差じと憂うること勿れ」とは是也。」

『教行証御書』池上本門寺 朝夕 八九四頁

抑も、仏が衆生の心田に成仏の種子を下す下種という。原初は本仏積尊が種子を下され、以後は衆生をして成熟せしめ、度脱させてこられた。

今末法においてはどのような下種の仕組みが考えられようか。種子を受ける衆生は変わらないが、植え付けする側はどのように想定するのか。寺院等私的のままではよいのか。問題があるとすれば、公式的な機関を置かねばならない。下種などどうあるかと問題にしないという考え方がありとすれば、宗祖教学上、一考を要すのではないか。逆に試算すべきは、四句要法が一妙と言われ、ここでの種子も一妙とされていくことである。本門戒壇はこの絡みを追求し、依嘱と下種の働きを整理すべき必要性を感じている。そこで、下種は本門戒壇の円戒の実義と置き、宗祖の三益(三義)の下種は、滅後末法の現代では、本門の戒壇

の卒壇者が行うこととし、あるいはその準用に依るものとしておきます。

二十一、父母孝養・報思の行は本門戒壇の円戒の実義なり

「外典三千余卷の所詮二あり。所謂孝と忠なり。忠も又孝の家よりいれたり。孝と申すは高也。天高ども孝よりは高からず。また孝とは厚也。地あつけれども孝よりは厚からず。聖賢二類は孝家よりいれたり。何況や仏法を学せん人、知恩報恩なかるべし。仏弟子は必四恩をしって知恩報思ほはずべし。(中略) 父母の家を出て出家の身となるは、必父母をすくわんがためなり」

『開目抄』池上本門寺 朝夕 二九一頁)

「儒家の孝養は今生にかぎる。未来の父母を扶ざれば外家の聖賢は有名無実なり。外道は過未をしれども父母を扶道なし。仏道こそ父母の後世を扶れば聖賢の名はあるべし。しかれども法華経已前等の大小乗の経宗は、自身の得道猶かないがたし。如況父母をや。但文のみありて義なし。今法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏顕れ、達多悪人成仏の時慈父成仏顕るれ。此の経は内典の孝経也。

『開目抄』池上本門寺 朝夕 二二三三頁)

外典三千余卷に説くところは帰するところは孝と忠の誠の心である。孝は天よりも高く、地よりも厚いものである。仏法を学ぶ人は知恩報思を殊更に身に為すべきである。仏弟子はその上、父母の思、衆生の思、国主の思、三宝の思の大切なことを弁

えてこれに報いてゆかなければいけない。

宗祖はこのように父母への親孝行、四思への報恩行を特に重要視され、僧俗に共通する徳目としてその実行を勧められている。古来から五戒(不殺生・不偷盗・不淫・不妄語・不飲酒)という仏教信者共通の基本的な道徳があるが、宗祖は法華信者に対して、五戒に加えて、親孝行、四思への報恩行を強く要請されている。長幼の序も含め、これらは本門戒壇の円戒の実義に加えたい。

(続く)

※本稿は「本圀寺報」第八号(令和六年十一月二十日)一一六頁より抜粋したものである。



本圀寺仁王門